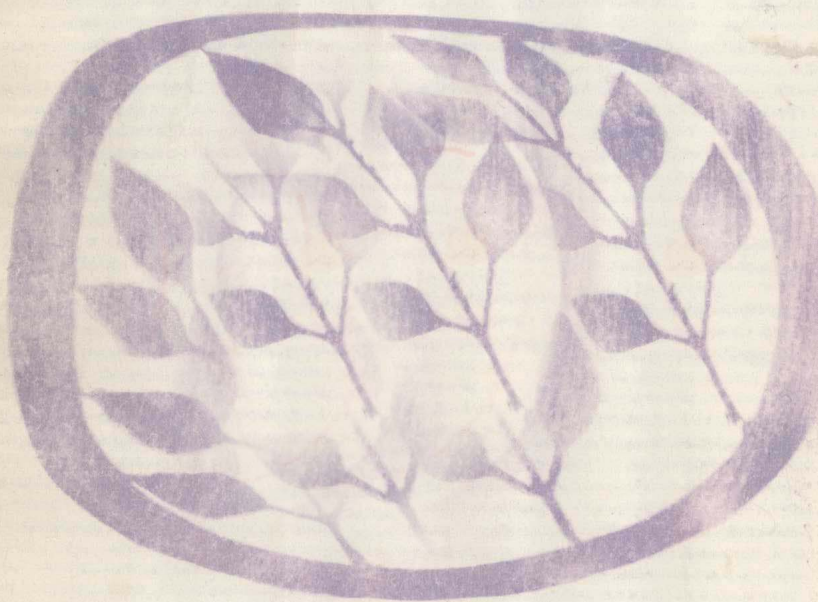


榎物語

山本周五

榎物語 山本周五郎





© Shugoro Yamamoto. 1963

榎物語

一九六三年五月二十一日印刷

一九六三年五月二十五日発行

著者・山本周五郎

発行者・佐藤亮一

発行所・株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話・東京三四一局七一―

振替・東京八〇八

印刷・製本・金羊社、新宿加藤

定価二九〇円

落丁乱丁本はお取り替えます

装幀 上口睦人

目次

榎物語

五

燕（つばくろ）

五

饒舌り過ぎる

一〇五

十八条乙

一五三

改訂御定法

一七七

源藏ヶ原

二三一

榎物語

榎物語

さわが十三になった年、国吉が下男に來た。国吉は十五歳で、よく働く少年だったし、二年のち、二人は愛し合うようになった。

さわの父は河見半左衛門という。母の名はわか。さわの下に一つ違いの妹なかと、その三つ下に丈二という弟がいた。河見家は七代まえに苗字帯刀をゆるされ、代代七カ村の庄屋を勤めていた。「榎屋敷」と呼ばれるその家は葉川村の段丘の上にあり、ほぼ南北にのびる越後街道と、魚野川が眺められ、白い土塀をまわした広い屋敷の東南の隅に、樹齡五百年以上といわれる榎が、ぬきんでて高く梢を伸ばし、枝をひろげていた。

葉川村は越後のくに小出の郊外で、越後街道に面し、また会津若松へ通ずる六十里越えの山道が、うしろにのびていた。街道を往き來する人たちや、六十里越えをする人たちにとつて、河見家の大榎は眠じるしの一つであり、それが見えたと、ようやく小出の宿の近いことを知り、あるいは名残りであることを知るのであった。

小出は会津藩に属し、その代官所がある。絹と木材の集散地で、河見家でも広い木山を持っているため、庄屋のほかには藩の山方の差配を命ぜられてい、屋敷のまわりには樵たちの長屋があった。——国吉はその長屋で生れた。父は善吉といい、河見家の樵がしらで、妻とのあいだに六人の子があり、国吉はその四番めの二男であったが、国吉が五歳の年、善吉は半左衛門に土地を買って貰い、蒔田という村で百姓になった。善吉は青年になるまで百姓をしてい、それから河見家

の樵になったのだから、彼自身は帰農というわけであるが、妻や子供たちには馴れない仕事であり、環境もいっぺんに変ったため、新しい生活にはなかなかすめなかった。国吉は特にのら仕事に嫌いだっただけで、十五になるとすぐ、すすんで河見家の下男に住み込んだ。

さわは軀がひよわく、縹緖きりぎすもあまりよくなかった。河見家の長女でありながら、そういったおうようさもなく、いつもどこかの隅が、人のうしろに隠れているというようすであった。父の半左衛門は「まるで貰われて来たような」おかしな子だ、と云っていた。——妹のなかは姉とはまったく反対で、姿かたちも美しいし愛嬌もあり、頭がよくてすばしこくって、小さいじぶんからにんき者であった。——なかにはこういう逸話がある、彼女が六歳のとき、小出から代官を招いて饗応きやうおうした。これは殆んど毎年の例なのだが、なかは代官とその下役たちが接待されるのを眺めていて、なにを思いついたものか、仏間から小さな本尊仏を持ち出して来、それを代官に示して「これはなんという物ですか」と訊いた。主人役の半左衛門や、接待していた人たちが、驚いてとめようとしたが、なかのすばしこさに、それもまにあわなかった。

「そうさな」と代官は本尊仏を見て、仔細らしく答えた、「阿弥陀あみださまのようだが、それともお釈迦しやくかさまというかな」

「違います」となかが云った、「これは木を彫って色を塗った物ものです」

「よしよし」と代官は笑った、「それでは木を彫って色を塗った物だとしよう」

「それなのに、どうして人が拝むんですか」

父の半左衛門はたまりかねて、叱ったり、乳母を呼んで向うへつれてゆかせようとしたりし

た。代官は笑ってそれを押し止め、いかにも考えぶかそうに云った。

「それはむずかしい話だが、そうさな、つまりそれは木を彫って色を塗っただけではなく、阿弥陀さまの姿をしているからじゃないかな」

なかは上眼使いに代官を見て、こくつと頷き、よくわかったという顔つきをすると、黙って本尊仏を持ってその場から去った。どうしてあんなことをしたのかと、あとで父親に訊かれたとき、同じ人間なのにみんなが代官にべこべこする、どっちも人間に変わりはないのに、どうしてだろうと思ったからだ、となかは答えたそうである。これは代官に向ってじかに答えたともいわれるが、作り話のようだし、その伝説のたねだというべつな話もある。しかも誰ひとり疑う者がなかったのは、なかにはそんな機智があつてもふしぎはない、と思わせるようなところがあつたからである。

なかが十五になると、縁談がもちこまれた。そのとき初めて、ひとびとは姉のさわの存在に気がついた。気がついたのは両親でもきょうだいでもなく、足助あすけという飯炊きの老僕であつた。

「そんな間違つた話はない」となかに縁談が始まつたと聞いたとき、足助は云った、「――姉さまをさしおいて、妹の縁談を先にきめるなんということは順序が違ふ、庄屋さまもある人がそんなことをして、世間に済むわけがあるものではない」

その評はまず出入りの者に広まり、半左衛門夫妻の耳にもはいつた。みんな姉娘のいたことに気づき、そうだったなと、改めて見直した。これはさわのために逆効果となつた。いままではつとめてどこかの隅とか、人の背中に隠れるようにしていたため、人人は彼女については無関心に

慣れていたが、さて前面に押し出されたさ^わを見ると、縹緖のよくない顔の、陰気な、僻^{ひが}んだような表情や、動作ののろさ、話しぶりのへたさ、気のきかなさなどがめだつて、十六歳になった河見家の長女、という人柄とは思えないことがはつきりした。

「誰も知らないのだ、姉さまは本当は氣だてのやさしい、賢い生れつきなのだ」と足助はいきり立つた、「^なかさまの本尊仏の話も、實際は姉さまの話がもとなんだ」

或るとき足助が、自分の小屋でいたずらに仏像を彫っていた。じろうとの見よう見まねで、ついに出来あがりはしなかったが、彫っているときに、さ^わが来て、それはなんだと訊いた。わけを話すと不審そうに、そんな木などで仏さまが作れるのかと反問した。そこで足助は、菩提寺の御本尊も木で作^{こんじき}り金色に塗ったものだ、ということ。また、人がそれを拝むのは仏さまに対する信心であつて、彫った木や塗った金色を拝むのではない、ということを話した。

「おらの云つたことは間違っているかもしれない」と足助は云つた、「けれどもこれが本尊仏とお代官の問答の出どころだ、本人のおらが知つてゐるだ」

その話を信ずる者はなかった。足助はときどき大きなことを云う、彼が河見家へ飯炊きに雇われたのは、当時から二十年ほどまえの四十代だったが、そのとき「おらは江戸の八百善で板前を勤めた」と自慢したそうで、村では知らない者がなし、長いこと笑い話のたねになっていたから、彼の云うことに耳をかすような者はなかった。けれどもただ一人だけ、足助と共にさ^わの味方をする者がいた。それは下男の国吉であつた。

河見家には下男が五人いた。ほかに番頭、手代、若い者など、庄屋と山方差配の事務や用達をする雇い人が十四五人いたが、下男も倉番、庭番、勝手番などと役割がきまつてい、国吉はなんにでも使われる雑役であつた。

国吉は男ぶりもばつとせず、負けぬ氣ばかり強くてめはしがきかず、人にしたしまないので、誰にも好かれないうばかりか、山猿といつてばかりにされていた。陰でそう云われるだけでなく、しばしば面と向つて「おい蒔田の山猿」などと呼ばれ、口惜しさのあまり幾たびか相手にとびかかつた。だが、国吉は軀も小さいし力も強いほうではなく、逆に叩きつけられ、瘤や鼻血を出すのがおちなので、独りでくやし泣きに泣く、というふうになつていった。――内容は違ふが、これはさわの立場とどこかに共通したものがあつて、早くからお互いのあいだに、哀れなというおもいが、ひそかにかよつていたようであつた。さわが十五になつた年、三番倉の脇に蓆を敷いて、せつせと茶筌を作つていた。すると誤つて指に棘を刺し、それがとれないので困つてゐると、国吉が通りかかった。ごく細く割つた竹の棘で、右手の中指の第二節のふくらみに刺さり、爪で摘んだり歯で噛んだりしたため、そのふくらみが赤くなつてゐた。

毛抜きを持つて来ましよう、と国吉が云つた。いいえそんなことしないで、とさわが云つた。ひとに知られたくないのだ、ひとに知れて笑われるのがいやなのだ、と国吉は思った。いいことがあるからためしてみましよう、触らないで待つていて下さい。国吉はそう云つて走つてゆき、

まもなく戻つて来ると、なにかの草の葉を焙^{あぶ}つたような、べっとりした物をさわの指の患部に貼り着けた。これで棘^{とげ}が抜けるかもしれませんが、村ではよくこうしていましたから、と国吉が云つた。おまじないなの、とさわが訊いた。さあ、と国吉は口ごもり、いじらないでそつとしておくんですよ、と云つてたち去つた。

それが二人の口をきいた初めであり、愛情の芽生えともなった。もちろんすぐにはない、人の眼が多いし国吉には暇がなかった。河見家の長女と下男とでは、側へ寄る機会も極めて稀にしかなかった。けれども、二人は遠くからいつも相手を見、お互いの噂を聞きのがすまいとしていた。——なかに縁談が始まり、足助じいさんが怒りだしてから、国吉の心はさわに対する同情と憐れみでいっぱいになった。彼は十八歳になつていたが、背丈はあまり伸びず、肩と足だけが不調和に逞しく、そして猫背になった。いつも重い物を背負いあるくためだろう、陽にやけた黒い顔はおろかしく、ただ、いつも敵意に燃えているような眼と、怒りを抑えているようにきつとひきむすんでいる唇とに、負けぬ気の激しさがうかがわれた。

なかは幾つかの縁談に首を振り、江戸へ出てくらしいたとか、生涯ひとの嫁にはならないとか、売れ残りの姉がいるから世間が狭い、などと拗^すねていた。

晩秋の昏^くれがた、薪小屋へ薪を運んでいた国吉は、庭の向うに人がいるのを見たように思ひ、なんということもなく眼をそばめた。そつちはこの屋敷の東南に当り、あの大きな榎が立っているうしろは、杉林と藪のほかなにもなく、ふだんあまり人の近よらないところであった。——あんなところに、誰だろう。国吉は腰から手拭を取つて、汗を拭きながらそつちへあるいていっ

た。かなり濃くなつた黄昏の、ぼんやりした光りの中で、その人影はすうと榎の向うへ消えた。彼はいそがない足どりで、反対側から榎をまわつていった。するとそこにさわの姿が見えた。彼女は榎の幹に凭れ、両手で頬を掩つて泣いていた。国吉はとまどい、暫くためらつていて、それから静かに呼びかけた。どうなさいました。どうかなさつたんですか。さわの睨り泣きがやみ、ゆっくりと振向いた。

「ありがとう」とさわは微笑した、「なんでもないのよ」

国吉も頬笑み返しながら、それなら自分はたち去るべきだろうか、それともいたほうがいいだろうか、と考え迷つた。

「このあいだはうれしかったわ」とさわは低い声で云つた、「知らないうちに抜けてしまったの、あれはなんという薬なの」

国吉はさわがなんのことを云っているのか、すぐには理解できなかった。そしてそれが棘を刺したときのことであり、そのあいだに二年も経っているのを知つて、おどろきと、かなしいような気分浸された。

「あれはしぶきという草の葉です」と彼は答えた、「あのときは火で焙つたのですが、火傷にも効くし、干したのを煎じて持薬にする者もいます、——このあいだと仰しだったので、なんのことかと思ひました、あれからもう二年の余にもなりますからね」

「あたしが十五の年だったわね」さわは頭の中でその年月を思い返すようにみえた、「——ほんとうに」と声をひそめて云つた、「あたしついこのあいだのことのように思つていたのに、本当

にもう二年も経つのね」

さ、わもその事実に、おどろいたようすを隠さなかった。彼女もその日までずっと、彼の姿をばなれたところから見まもり、どんなつまらない噂をも耳にとめていたのだ。こうして二人で口をきくのは二度めであり、初めてのときから今日までに、七百幾十日も過ぎ去っているということが、まるで嘘のように思えるのであった。そのようにさ、わのおどろいている気持が、国吉には触れてみることでできる物のように、はつきりとわかった。

「どうかしたのですか」と彼はまえより親身しんみな気持になつて訊いた、「なにか泣くほど辛いことでもあるんですか」

さ、わは恥かしそうに、顔をそむけながら、そつとかぶりを振った。

「本当になんでもないの」と彼女は囁き声で云った、「ときどき泣きたくなるところへ来るのよ、心配しないで」

国吉はその夜よく眠れなかった。ここは山ぐにで、秋にはいると夜はかなり冷える。掛け夜具を二枚にしても隙間風がはいるため、夜具の中へちままつて眠らなければならぬ。山は朝ごとに霜で氷こしもり、まもなくそれが里へとくだつて来るだろう。にもかかわらず、国吉は寒さを感じただけでなく、頭の中も軀の芯も熱っぽく、掌や脇わきの下は汗で濡れるくらいだった。明くる朝、国吉は眠りが足りないのに、誰よりも早く起き、はれやかな、これまでになく活き活きた顔つきで、元氣よく働きたした。庭を往き来するとき彼はひそかに榎のほうへ眼をはしらせた。手のあいているとき、弁当を使うときにも、その眼は榎のほうへ吸いよせられていた。

そのころさ、わは茶筌^{ちやせん}作り^{ちやせん}に熱中していた。姉妹は十二三のころから茶の稽古を始め、妹のなかはすぐに飽きたが、さ、わはいまでも師匠について、茶筌^{ちやせん}や茶杓^{ちやしやく}の作りかたも覚えた。どうしてそんなことをするのかと訊かれたら、——訊かれたことは一度もなかったが、自分のような者は嫁にもゆけないだろうから、と答えたであろう。厄介者で一生を送るとすれば、僅かでも自分の手で稼げる仕事を覚えておきたい。さ、わはそう考えていたのだ。

「生れて初めてだわ」茶筌^{ちやせん}を作りながらさ、わはそつと呟いた、「——泣くほど辛いこともあるんですかつて、あのひとはあたしのことを氣にかけていてくれたのよ」

さ、わの内部で新しい感情がめざめた。以前にも似たような経験はあったが、似ているというだけで、要素はまったく違っていた。いま彼女は、十七歳になった娘の感情にめざめたのだ。ことに、それまで人から愛されたことも、氣にかけてもらったこともなく、そういうことを求める望みを持ったためしもない者なら、その新しく生れた感情がどんなに力づく、純真に、拒みがたい作用をするかは云うまでもあるまい。その日の夕刻、もう手許が暗くなりかけてから、さ、わはそつと庭へ出ていった。——それはちょうど、国吉が諦めて、榎の傍らから去ろうとするところであった。霧^{もろ}のたちこめて来た黄昏の中で、二人はお互いの姿を認め、静かに双方から歩みよつた。